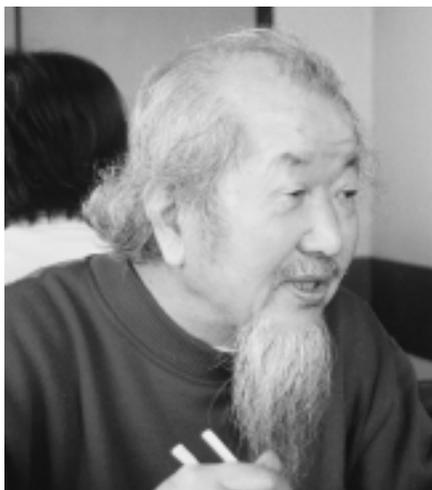


千年もつ古代釘を復元した鍛冶師



白鷹幸伯氏

しらかあ・ゆきのり 昭和 10 年(1935)年、松山市生まれ。中央大学の通教生として勉学に励む一方で、家業の鍛冶屋を手伝う。26 歳で上京、日本橋の木屋刃物店に就職し、中大法学部の夜間部に転籍。通算 8 年がかりで卒業した。

この間に宮大工・西岡常一棟梁と知り合う。兄の病死で、松山に戻って鍛冶に専念できたのも、同氏のアドバイスが決め手となった。昭和 56(1981)年には西岡棟梁の指導で、薬師寺西塔再建用の鳳凰型和釘 7 千本を 1 人で鍛える。ライフワークは古代大工道具の復元。著書に『鉄、千年のいのち』(草思社刊)。和釘復元に対し、とし 3 月 5 日に吉川英治文化賞を贈られた。松山市堀江町在住。

知識の前に知恵がある

和釘といっても「それ、何のこと？」という人がほとんどだろう。飛鳥・白鳳の時代、つまり 1000 年の歳月を経ても錆びて朽ちることなく、建物を支え続ける古代釘を「和釘」という。法隆寺の五重の塔などに使われている。その釘をいま作ることができる鍛冶職人が、わが中央大学の卒業生であるということを知ったのは昨秋、NHK が放映した「薬師寺再建」の番組だった。そんな腕を持ったすごい人が中大の先輩にいるなんて信じられなかった。その先輩とは、愛媛県の松山市内で鍛冶屋を営む白鷹幸伯さん。お宅のすぐ近くの海岸には瀬戸内海の波が打ち寄せている。「遠いところを、よう来たな」と自慢の長いあご髭をなでる“豪快なお父さん”が話す内容も豪快だった。

(学生記者・大谷 秀之)

先輩の子供のときの話から伺いたいのですが。

親父がここで鍛冶屋を始めていますね。まあ、駅馬車の芯棒を鍛えたり、車輪の輪金の修理や、サザエを挟む道具を作ったり、頼まれればなんでも作る典型的な野鍛冶でしたよ。僕は地元の高校と短大に通いながら、すでに親父の商売を継いでいた長兄の仕事を手伝っておったんです。その後、中央大学法学部の通信教育を始めたんですが、4 年たっても卒業できない。とにか

くレポートが通らんのや。

この時、日本はいわゆる産業構造の変革期に入っておった。道具は工場で作られるようになり、ええ仕事は少なくなる。なんぼ働いても暮らしは楽にならん。正直、鍛冶屋は最低の仕事やと思った。3 年ほどたった頃、単位を計算したら 104 単位ぐらいあった。試験を受ければ転籍できることを知り、苦勞している兄たちを残して上京した。昭和 36 年だった。日本橋にあった刃物専門の老舗「木屋」に就職し、大学に

通った。鍛冶屋を捨てたくせに、転がり込んだ先が刃物屋とはね（笑い）。

当時は日本橋から学校まで歩いて通っていたが、とにかく残業が多くてね、月に70時間ぐらいやっておった。とても本を読むなんて生活ではなかった。でも、会社にいいおばさんがあってね。「早く学校に行きなさい」と、僕の首をつかんで押し出してくれた。ありがたかったな。「あの人は今ごろ、元気でやっておるかなあ……」。

そのころの大学の様子は。

学生がやたらに多かった。普通の授業

真っ赤な火花とともに、たちまち古代釘が……



には30人ぐらいしか出ないのに、試験のときは400人ほどおるんだ。それが当時の夜間部の現状だった。でも、いろいろな学生がおって退屈しなかった。都庁の人が大勢おったし、警視庁の鑑識課の人もおったし、親子で机を並べている人もおった。面白いのはね、廊下を歩いていると、見ず知らずの昼間の学生が頭を下げて通りすぎるんや。そりゃそうだろう。こっちは30過ぎの大学生だったから（笑い）。

当初は弁護士になろうと思っていたが、こいつは直ぐにあきらめた。六法はさっぱり頭に入らんし、図書館に行けば行ったで昼の学生が必死の形相で勉強しとる。こい

つらには、とてもかなわんと思ってね。そのうち刃物を扱うのが面白くなってきた。「価値ある仕事だな。もう少し、この業界にいてもいいかな」と思うようになった。

それなのに、なぜ松山に戻る決心をされたんですか。

家業を継いでいた長兄が49歳で亡くなってしまった。この兄の跡を継いだ方がいいとは思ったんだが、田舎に戻って鍛冶屋をするかどうかを悩みましてね。「仙台の大学で教鞭を取る兄、もう1人の行政書士の兄に対して、両親の面倒を見に松山

に帰ってくれとはいえなかった」。結局、3年ぐらい木屋に残ることにした。

この悩んでいる最中に思いがけない出会いがありましてね。昭和46年の5月に木屋の店頭で、西岡常一さん（平成7年死去）というすごい棟

梁です。この方は当時、最後の宮大工と呼ばれ、法隆寺や薬師寺の建造物の再建・修復に携わった棟梁でした。その時、私はヤリガンナという古代道具の復元をしたいと思っていたので、西岡さんにそれを訴えたところ、図に描いて懇切丁寧に教えてくださった。それから文通が始まるわけです。全部で17通ほどいただきました。いまでは、その手紙は家宝です。

そんな手紙のやり取りが続くうち、「両親をみなければならぬし、会社も私を手放さない」という悩みをちょっと打ち明けたんですよ。そしたら「会社も大変だろうけど、両親のところへ早く戻って面倒をみ

てあげることが先決だ。腕に職を持つ人間は、どこへ行っても生活できる。とにかく四国に帰って鍛冶屋を再開しなさい」というアドバイスをいただいた。あの方にお会いしなければ私は決断できなかった。終生の課題としての「古代道具の復元」にも取り組めなかったかもしれない。



これは岩国の錦帯橋改修に使われた

すると白鷹さんが一番、影響を受けた方は西岡棟梁ですね。

もちろんです。こんなこともありましたよ。西岡棟梁の新築のお宅にお邪魔したときのことでした。「これも棟梁がお建てになったんですか」と聞くと、「いや、私は民家はよう建てまへんのや。大工に建ててもらいましたんや」といわれた。ある新聞に西岡棟梁の伝記が載ったことがある。そのなかで「西岡家には民家を建ててはいけないという家訓がある」と書かれていた。そこで白鷹さんは「それは違う。民家を建てる細かい技は宮大工より大工の方が上。ところが屋根が何10メートルもあって、ケタも反って立っている柱の角度も全部異なるとなると、大工にはできない。だから、民家を建ててはならないという家訓があるのは、宮大工としての感覚が疑われる。そ

の感覚で寺の建物を建てたら笑われてしまう」ということなんだ。

僕は驚いたね。「民家を建てるのなんか阿呆らしい」というんかと思ったら、そうじゃない。「民家はよう建てませんねえ」という言葉に、この人はすごい人だと思った。人の仕事を尊敬する偉大さがある。それぞれの世界で真剣にやった職人ば学者以上なんです。

西岡棟梁は学者嫌いでした。薬師寺を再建で学者を4～5人呼んで意見を聞いた時、全面的に学者の意見に従えば良かったのだが、西岡棟梁が後ろで聞いていると、彼らがまったく素人での外れのことを言っていた。そこで意見をちょっというた。すると、ある学者が「大工風情が黙っとれ」といったらしい。

その時、西岡棟梁は何といいましたか。

それはね。「では、お聞きしますが、1300年前に学者はおりましたか。1300年前に学者が、この建物を建てましたか。みんな大工が建てたんです。私はおかげさまで当時の大工の知恵を、法隆寺にいて大工の3代目として見てきました。学者だけで物が建つなら、どうぞ建ててください」と。それ以来、学者仲間は「法隆寺には鬼がいる」と言ったそうですよ。鬼じゃない。当たり前のことを言っただけです。

ところで、鉄にまつわる話をお聞かせください。

鉄は宇宙から飛来してきたものなんです。その頃の地球は二酸化炭素は充満していたが酸素はなかった。だから、飛来してきた鉄はまったく酸化しないまま、地球の内部に固まっていった。そして、たまたま何かの拍子に表面に噴出してきたところ、約40億年前に酸素ができて、そこで初めて錆びた酸化物として表面に現れるわけです。そして人類がずっと後に誕生する。鉄の酸素を除いて還元させ、鉄のオリジナ

ルを作って、それを道具とした。だから鉄も宇宙の生成物の1つなんだ。それを工夫して享受しているのに、その鉄で戦争するという愚かさ。人間の悲しい性とでもいうのかね。

大体、鉄という字は、今でこそ金偏に失うと書くが、旧字は“鐵”。この字を分解すると、“金の王なる哉”と書く。人の営みと文化を支えてくれる素材の王様なんだ。例えば、ワシが作っている昔ながらの和包丁だって、先端の鋼の粒子が酸化によって剥がれ落ちる。つまり、常に新陳代謝して切れ味を保つ。自然に薄くなってくれるんですよ。剥がれ落ちた鉄はどこへいくかということ、食べ物と一緒に体に吸収され、ヘモグロビンになるわけです。そして脳にたっぷり酵素を送ってくれるとう具合だ。

“鉄学”の世界も奥深いんですね。では、職人の世界は…。

東京で異業種間交流の会で、講演を頼まれた時の話ですがね。私は「居並ぶ重役たちを前に、西岡棟梁から学んだ話を基に『飛鳥・白鳳の技と知恵』という題名で話をした。知識は活字のなかで覚えたもので、知恵は実体験のなかで覚えた動物的な感覚ですね。要するに、法隆寺や薬師寺は、あまり知識で建てたわけではないということをしたわけです。

現代の知識で建ったものが70年しか持たないのに、なぜ知恵で建ったものが1300年も持つのか。やはり、そこには知恵の集積があったわけです。いま、知恵が見直されつつあります。いまは何をするにもコンピューターでやっているが、その誤りに気がつかない。コンピューターを直すコンピューターはない。それが怖い。

企業の方たちは口をそろえて「会社に職人がいなくなった。試作品一つを作るにも、満足にヤスリがけも出来なくて困る」という。しかし、企業の側にも問題がある。僕

は「なぜ、腕のいい技術者を残さなかったのか。定年といただけで、なぜ退職させるのか」といったんです。

白鷹さんの人生観は、やはり「自由闊達」ということでしょうか。

とても專業では食えないので、困ることは錢に追われるということだけで、後は自由だ。こんな自由はなかなか享受できない。なかでも発言の自由は大きいですね。職人社会で、なぜ生きてこられたかという“発言の自由”があったからです。役人



作業場に供えられたミカン

だったから、そうはいかない。僕も親父や兄貴と同じ野鍛冶です。

私は3代目を継がせようと思ってる息子が、私を見ていて「いまの世の中は自由だというけれど、サラリーマンを見ていると自由はない。圧迫がある。だけど親父にはある」といっとる。それが僕の後を継ぐ一番の理由なんだと思います。

長いこと、ありがとうございました。

(おわり)

おことわり：この記事は、現役学生用に発行している『Hakumon ちゅうおう』に掲載されたものを再録したものです。